

綾波の 行方

萌えぎの
エレン

内容見本

はなごよみ

月曜日。

2021年3月8日に公開された映画『シン・エヴァンゲリオン』を見た。

面白かった。

ああ、今、自分はエヴァンゲリオンを見ているんだなあと感じながら見ていた。

これまでのエヴァンゲリオンの要素をもれなく詰め込んだ、

最高の出来映えだ。

鑑賞した直後、それ以上の言葉がなかった。

凝った構図と作画。

なんだかよく分からない巨大なものがぶつかり合う快感。

聞いたことのない破壊音。艦隊戦。

意味不明な専門用語について劇中で説明が無いこと。

この映画、通称シン・エヴァは、圧倒されるだけの映画だ。

だけどぼくは、その後、綾波レイについて何も言わなかった。

あんなに好きだったのに、ぼくは沈黙してしまった。

それがどうしてなのか、考えもしなかった。

目次

エヴァンゲリオンとは	3
シン・エヴァ公開	5
公開初日の感想	5
映画のあらすじ	7
碇ゲンドウの吐露が意外	8
NHK プロフェッショナル庵野秀明	9
賢者のブログ	10
綾波レイが好き	11
あとがき	14

エヴァンゲリオンとは

ウェブで検索すれば分かることだけど、一応、これまでのエヴァンゲリオンについて記しておきます。

1995年にテレビ東京で放送された『新世紀エヴァンゲリオン』とはロボットアニメだ。ロボットアニメとはアニメの人気ジャンルのひとつで、主人公が巨大な戦闘用ロボットに乗り、敵と戦うというもの。監督の庵野秀明はウルトラマンが好きだったらしく、一言で言えばウルトラマンのようなロボットアニメだ。どこからともなく現れる謎の敵から人類を守るべく作られた、人型の巨大ロボット。それがエヴァンゲリオン。このロボットを操縦するのは、主人公の碇シンジ、綾波レイ、惣流・アスカ・ラングレーの3名で、全員が14歳の若者だ。2000年に世界規模の災害が起こり、人類の半数が減んで、生態系は破壊された。その災害を調査していた組織が、後に特務機関ネルフと呼ばれる武装集団となる。ネルフの最高責任者である碇ゲンドウは、シンジの父親。2000年の災害と関連すると考えられる正体不明の怪物が出現し人類を脅かす存在となるなかで、ネルフは人型の決戦兵器「人造人間エヴァンゲリオン」を開発。2015年、シンジはゲンドウに呼び出されてエヴァンゲリオンに乗り、使徒と呼ばれる正体不明の怪物と戦えと命ぜられる。物語はそこから始まる。

この作品は色々変わったところがあって、ただのロボットアニメでは無かった。エヴァンゲリオンは14歳の少年少女にしか動かすことが出来ない。そして、よくわからない理由によって動作が不安定なロボットだ。制御不能になり暴走することも珍しく無い。しかし、そのような危険極まりないロボットであるエヴァンゲリオンを使って戦わなければ使徒によって人類は滅ぼされる。敵はなぜか使徒と呼ばれるけれど誰がそう名付けたのかは不明だ。そして、ここからが問題なのだが、全ての使徒を倒した後に（使徒の数は限られている）エヴァンゲリオンというロボットを使って人類補完計画が発動されるらしい。しかも、ゼーレと呼ばれる謎の団体から、ネルフの指揮とその計画の遂行を命じられているゲンドウは、実は人類補完計画を乗っ取り、何か別のことを行おうと暗躍している。主人公のシンジたちは、そのようなことも知らずに、幾多の戦いで精神的に疲弊していく。人類補完計画が本当に平和をもたらすのか。ゲンドウの目的は何なのか。そもそも、暴走を繰り返すエヴァンゲリオンとは「何者」なのか。作品は多くの謎に包まれている。シンジにとって母親のような存在になるのかもしれない綾波レイ。戦闘でプライドを引き裂かれたアスカ。それらも、物語の要である人類補完計画と密接に関わってくる。エヴァンゲリオンを操縦する少年、主人公の碇シンジは深いトラウマを抱えた人物だ。そして、彼の救済と、エヴァの登場人物の未来を占う人類補完計画がどうなるのかは、シンジの最終的な判断に委ねられる。

ところが、最終回の直前、物語は唐突に、ロボットでの戦闘を描くのをやめてしまう。あの架空の場所に主人公たち主要人物は集められ、彼らは自己啓発セミナーを受けて、物語は終わった。ほとんどの謎の解明は放棄された。そして、本来の最終回を描くべくテレビ放送後に製作された劇場版『新世紀エヴァンゲリオン劇場版 Air/ まごころを、君に』（英題『The End of Evangelion』通称 EOE）でも、彼が、そして人類が救われたかどうかは、はっきりとは描かれず、見る者によって解釈が異なるラストとなった。

作画や演出は非常に素晴らしいものだったが、スケジュールや予算などの理由により作画が「動かない」回も少なく無かった。しかし、「動かない」ことを逆手に取った効果的な演出がなされた。庵野は、それをコストパフォーマンスを上げる手法、情報のコントロールと呼んでいた。

ここまでの説明では、見たことのない者にとって意味不明かもしれない。しかし、実際に見ても「分からない」ことが多い。とにかく「分からない」作品で、良く言えば、視聴者の想像力にまかせる、悪く言えば、親切ではない作品。しかし、それゆえに視聴者はその謎について延々と「語る」ことに、とりつかれた。ぼく自身もそうだった。

そして、この作品は庵野が立ち上げたアニメスタジオが作る映画、新劇場版シリーズとして、一から作り直されることになった。大まかなストーリーは同じだが、より分かりやすいものを目指した。実際には細かな変更点が多々あり、同時に、これまでネガティブに描かれた描写がポジティブに変換されていた。最初のテレビシリーズを作ったスタッフの多くが関わり、最新のアニメ技術を用いて、当世風に作り直す。続編ではなく「繰り返しの物語」（庵野の所信表明文より）であり、分かりやすく言えば、童話のような古典名作の現代版アップデートのようなものだろう。

2007 年に 1 作目の『エヴァンゲリオン新劇場版：序』が公開。2009 年に『エヴァンゲリオン新劇場版：破』が公開。そして、2012 年に公開された 3 作目の『エヴァンゲリオン新劇場版：Q』が最大の問題作とされた。この新劇場版シリーズのラストがシン・エヴァこと『シン・エヴァンゲリオン』だ。

テレビシリーズの終盤となる 24 話、碇シンジと渚カヲルのエピソードを作り直した。『Q』の内容を簡単に説明すると、そういうことである。しかし、今回の『Q』において、シンジを取り巻く世界は、驚くほど変わり果ててしまった。前作の『破』で、エヴァンゲリオン初号機で使徒の内部から綾波レイを救い出したはずのシンジは、初号機のなかに閉じ込められ、目覚めたときには 14 年が経過していた。綾波を救い出すシンジの行為は、セカンドインパクトと同等のサードインパクトと呼ばれる地球規模の大災害を発生させた。シンジは、かつての仲間から犯罪者扱いされる。なぜこうなったのか。どうして 14 年も経過しているのか。その説明は、シンジにも、観客にも、なされない。誰もが想像出来なかった世界。観客は、何も知らないシンジとともに、過去に起こった事件を知ることになる。いきなり 14 年後の世界に現れたシンジは、なぜか 14 歳のままである。そして、自分が眠っている間の世界に何が起こったのかを、全く知らない。身に覚えのないまま囚人の

ような扱いを受けることに、大いに困惑する。碇ゲンドウと冬月コウゾウを除く旧ネルフのメンバー、葛城ミサトや赤木リツコたち、そして式波・アスカ・ラングレーや真希波・マリ・イラストリアスは、打倒ネルフ目的の組織、ヴィレのメンバーとなっている。アスカやマリは、シンジと同様に肉体の成長が14歳のまま止まっている。その不可思議な現象をアスカは「エヴァの呪縛」と呼ぶ。

ヴィレのメンバーの多くはサードインパクトを起こしたシンジに対し、憎悪をむき出しにしている。旧エヴァであってもシンジがこれほどまでに非人道的に扱われることは無かった。彼らはシンジに「何もするな、エヴァに乗ったら殺す」と脅す。また、リツコはシンジに、エヴァンゲリオン初号機とのシンクロ率はゼロであり、操縦は不可能であると伝えている。ヴィレがシンジを生き返らせたのは、残酷でしかない。眠っていた彼を、いわば死刑囚として、わざわざ生き返らせたのだ。混乱するシンジの目の前に現れた謎の少年、渚カヲルは、一緒に世界を救おうとシンジに囁く。しかし、エヴァンゲリオン13号機に2人で乗り込んで、カヲルはシンジの目の前で爆死してしまった。

ツイッターなど、インターネットを見る限り、3作目の『Q』の内容に衝撃を受けたという感想は多かったと思う。

シン・エヴァ公開

テレビシリーズのラストとして描かれた映画、EOEでは、ネルフ対ゼーレの戦いがメインだったが、今回の新劇場版ではヴィレ対ネルフ（碇ゲンドウと冬月コウゾウ）に変わっている。人造人間エヴァンゲリオンを使って発動される、禁断のプロジェクト、人類補完計画。そして、ゲンドウが企てるその人類補完計画を阻止すべく、ヴィレが立ち向かう。

シン・エヴァは2021年に公開された。大幅に遅れたのは、後で説明するNHKの番組でも語られた、総監督の庵野秀明の不調が大きな原因だ。また、パンデミック、いわゆる新型コロナの影響もあった。

公開初日の感想

当時ぼくが書いたブログ、シン・エヴァを見た当日、公開初日の感想を、加筆修正して掲載する。

まず、ツイッターでも話題となっていたが、2時間半の上映時間は長かった（本編前の宣伝などを含めて3時間あった）。小便をぎりぎりまで我慢していたけど最後にスタッフの名前が出てきたときにぼくはトイレに立った。そして席に戻った。ちなみに、当日は朝から飲みものをほとんど飲まずに対策したけど、普段は積極的に水分補給を行っている。